HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	HOW DOES SOCIAL ECOLOGY SHAPE PEOPLE'S TENDENCY TO CONCEAL PROSOCIAL BEHAVIORS? THE ROLE OF RELATIONAL MOBILITY [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	李, 文ショウ
Citation	北海道大学. 博士(人間科学) 甲第15061号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/85435
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Wenqiao_Li_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）　　氏名：李　文俏

主査　教　授　結城　雅樹
審査委員　副査　教　授　安達　真由美
副査　准教授　竹澤　正哲

学位論文題名
How Does Social Ecology Shape People's Tendency to Conceal Prosocial Behaviors?
The Role of Relational Mobility
（社会生態はどのように向社会的行動の秘匿傾向を形成するのか？
関係流動性の役割に関する検討）

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の特筆すべき研究成果として次の 3 点が挙げられる。

第 1 は、人間の向社会的行動研究に対して新たな地平を開いたことである。本論文は、向社会的行動の秘匿という先行研究の乏しい現象を俎上に載せ、それを促進する社会環境要因とその影響過程を明らかにするという前例のない問を扱っている。血縁関係のない広範囲の他者や大規模な社会に対して自己犠牲的な向社会行動を示すことは、人間を他の動物種から峻別する特徴である。このような行動は適応上不利になる可能性が高いため、それが人間社会において特異的に見られるのはいったいなぜなのかが、近年の社会科学・人間科学諸領域における一大テーマであり続けてきた。この問題を解決するために提案されてきた多くの理論が共通して指摘しているのは、協力者が他者から肯定的な評価や報酬を受ける一方で、非協力者が否定的評価や罰を受けるとの社会的メカニズムの存在である。実際多くの実証研究で、他者からの監視がある状況では人が協力行動を示しやすいことが示されてきた。

だがこうした趨勢に対して本論文が取り上げたのは、むしろ他者からの視線と評価の期待があるからこそ人が積極的に向社会行動を隠蔽するという、上記とは全く逆の現象である。これが起こる理由は、卓越した向社会行動をしたことが周囲に知られると、しばしば妬みの対象となったり、競争的な人物であるとの悪評につながったりするからである。

こうした考察に基づき、本研究は、向社会行動の隠蔽度の強さを左右する社会環境要因を同定するという前例のない問に取り組んだ。その結果、対人関係の選択の自由度が低い低関係流動性社会に暮らす人ほど、向社会的行動が公表されたことに対して他者から否定的評価がなされるだろうとの期待を持ちやすく、その結果として向社会行動を隠蔽しやすいとの予測を支持する知見が得られた。

第 2 は、文化心理学研究に対する貢献である。当該領域では、日本人は従来「集団主義的」であるとされ、積極的な協力行動を通じて所属集団へのコミットメントを示すであろうと考えられてきた。しかし本論文が明らかにしたのは、集団主義社会の特徴の一つである関係流動性の低さが、むしろ集団に対するコミットメントの表明を積極的に抑制することにつながるという、従来の通説からは予測されない現象の存在である。

第 3 は、応用分野に対する貢献である。個々人の向社会行動を公表することには、それを見聞きした他者の協力行動を促進する社会的波及効果があることが知られている。これに対して、本論文の結果が示唆するのは、関係流動性の低さや悪評懸念の高さといった要因が向社会行動の隠蔽につながり、その結果として、社会全体の協力度を減少させてしまう可能性である。この考察に基づくと、向社会行動の開示を通じて社会全体の協力度を上昇させるための斬新な方策として、固定的で閉鎖的な対人関係に対してより大きな柔軟性を持たせたり、人々の間で交わされる評判情報の質を否定的なものからより肯定

的なものに変えたりといったことが考えられる。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会は、上記の学術的価値を高く評価した一方で、いくつかの課題も指摘した。第一は、実証研究の考察において、より深い解釈の余地が残されていた点である。具体的には、各実証研究における統計解析の結果に、著者自身が想定しているモデルとは別の残余効果が残されていたことに関する考察が十分とは言えなかった。第二は理論的な問題であり、本当に低関係流動性社会で向社会行動の隠蔽が起こるのであれば、当該社会では果たしてどのようなメカニズムを通じて協力行動が維持されているのかが明らかにされていなかった。しかしこれらの問題は、申請者が今後さらに理論的考察や実証研究を積み重ねる中で解決されるべきものであり、上述の卓越した学術的意義を損ねるものではない。また、英語論文としての記述スタイルや一部の文章表現についての不自然さも指摘されたが、それ自体が学位論文としての質に疑問を呈するほどではない。

以上を総合的に評価し、本委員会は全員一致して李文俏氏に博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。